

---

# **黒猫令嬢の気まぐれ**

鈍色満月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒猫令嬢の気まぐれ

### 【NNコード】

N0962Y

### 【作者名】

鈍色満月

### 【あらすじ】

「 我が國の誇る妖精姫。どうか私の妻になつて頂きたい」

その言葉が発端であつた。

主人公は金の波打つ髪に春の空の瞳を持つ、この度目出度く王子殿下に求婚された乙女 ではなく、彼女の親友である。

奇人変人の巣窟と名高い伯爵家の一人娘にして、周囲からは『黒猫令嬢』と渾名される彼女は親友に泣き付かれ、いやいや重い腰を上

げる。

目指すは親友の婚約破棄。

果たして黒猫令嬢は親友の願いを叶える事が出来るのか？

## やもやもの発端（繪書き）

初心者ですので、至らぬ所が多いこと御こますが、お付き合っていただければ幸いです。

## そもそもの発端

燐々と輝くシャンデリアの下、各々着飾った紳士淑女達。磨かれ過ぎて鏡面の様に反射する、真っ白な大理石の床。優雅な調べの音楽が流れる中、人々は手に手を取つて広間の中央へと足を踏み出す。

そんな中、一際目立つ一組の男女の姿があつた。

片や、波打つ金の髪と春の空の色と同じ色の瞳の乙女。片や、肩にかかるない程度の短い銀の髪に灰色の瞳の青年。

まるでおとぎ話の妖精王とその伴侣、又は神話の神々の様な麗しい姿に、広間中の者達の視線が知らず知らず二人に集う。けれども一人は周囲の視線を物ともせず、華麗かつ軽快にステップを踏み続ける。

漸く、一流の樂士達による旋律が終焉を迎える。

それまで手に手を取り合つて踊っていた男女達は、礼儀正しく手を放し、相手にダンスの礼を述べて別れるのがマナーである。

しかし。

お辞儀をするために手を離そうとした乙女の手を青年は離さない。

不審そうな眼差しの乙女に、青年は周囲の視線を集めたままにこりと綺麗な微笑みを浮かべる。

「我が王国の誇る金の妖精姫。どうか私の妻になつて頂きたい」

古式ゆかしき求婚の礼に則り、伴侶に望む相手の右手に軽い口づけを落した銀髪灰眼の青年の言葉に、乙女は顔を青ざめさせた。

## そもそもの発端（後書き）

そもそもの発端でした。  
主人公、未だ出て来ておりません。

## 巷で噂の伯爵家

とある大陸のとある王国。

そしてその王国内にて、隣国と隣り合わせの地域に、領土を構える伯爵家があつた。

王国の建国時代より、初代国王に仕え、その功績を認められた由緒正しき伯爵家。

度重なる戦の際にも多大なる功績を上げつつも、出世も名誉も固辞し、唯一途にひたすらに王国に仕える誉れ高き名家。

貴族達の身分制度である五等爵では第三位の地位であるにも関わらず、有事の際には国王からも意見を求められるといつ、榮誉ある一族。

というのは表向きの姿であり、その実態は奇人変人の巣窟。

それがセラーレ伯爵家であった。

\* \* \* \*

「エステル、エステル、エステル——！」

澄んだ春の空を思わせる瞳を涙で濡らし、部屋の主の許しも無く飛び込んで来たのは一人の少女。

波打つ月光を紡いだ様な金色の髪に、おどぎ話の妖精の様な可憐な容姿。

百人中、百人が美少女だと認める少女の名前はサラ。とある事情により、今この王国内にて最も有名な人物であつた。

「……なあに、サラ。洗面所ならこの部屋を出てすぐ左よ」

緩慢な動きで振り返り、面倒くさそうに言い放ったのは、この部屋の主にしてセラーレ伯爵家の一人娘・エステル。

彼女の動きに合わせ、艶やかな黒髪がさらり、と揺れる。サラが金の髪に春の空の瞳を持つならば、エステルは艶やかな黒髪に夜の様な黒の瞳という、実に対照的な二人であった。

「うう……。相変わらず冷たいのね。生まれた時からの親友に、もう少しばかり優しくしてくれたって良いじゃないの」「生まれた時からって、あんたとの付き合いは三歳からだったと思うのだけれど」

よよよ、とハンカチで両目を抑えるサラに、エステルが欠伸を噛み殺しながら答える。もう毎過ぎであるのにも関わらず、エステルはまだ寝間着を纏っていた。

「うう……。それよりもエステル。私に何か言つ事があるんじゃない?」

「言ひ事?……そうだねえ」

寝転がっていたソファから氣怠気に身を起こし、エステルは三歳からの親友へと視線を寄越した。

「取り敢えず、王子との婚約おめでとつ  
「違うんだつてば——!—」

少女の悲鳴が、伯爵家の邸一杯に響き渡った。

## 巷で噂の伯爵家（後書き）

一人娘とは『姉妹のいない娘』という意味です。

## 親友は時の人

月光を紡いだような、波打つ金の髪。

春の空をそのまま映したような、澄んだ瞳。

可憐な容姿と儂げな雰囲気も相まって、社交界の間では『金の妖精姫』として名高い美少女。

それがサラ・フィオーレである。

そんな彼女は一夜にして、この王国内で最も有名な乙女になっていた。

\* \* \* \*

「よかつたじゃない、サラ。十年来の夢が叶つて」

「十年来の夢つて……。エステル、私の夢をなんだと思っているの？」

白いレースのついた手巾ハンカチに皺が出来るまで、ぎゅうぎゅうに握り

しめたサラが涙目のままエステルを見つめ返す。

それに、エステルは眼たまごに瞼をこすりながら答えた。

「ん？ だつて昔“サラの夢は大きくなつたら王子様と結婚する事！」 つて言つてたじゃない」

「いやああ！ なんで、言つた本人も忘れているようなことを覚えているのよ——！」

手巾を握りしめたまま、サラが絶叫する。

その姿に憐れで可憐な妖精姫の面影はどこにも見当たらぬ。

「第一、なんでそう嫌がるの？ 相手は王子だよ？ 玉の輿じやないの」

「エスティル……。貴女、相変わらず意地悪ね」

ふう、と可愛らしく頬を膨らませながら、サラがエスティルを睨む。

「あんた、まさかとは思つけど、まだアレの事が好きなの？」

「そうよ。悪い？」

ふん、とそっぽを向いたまま、サラは答える。

「……強いて言わせてもううなう、あんたの男の趣味は相変わらず最悪だわ」

「つぬれこー！」

『金の妖精姫』と謳われる親友の、長年の片思いの相手を知っているエスティルとしてはそうとしか評しようがないのだが、その答えは親友の求めるものではなかつたようだ。

顔を真っ赤にして睨んでくるサラを半眼で見据えたまま、エスティルは面倒臭そうに髪を搔き揚げる。

「……そこまで知ってるのなら、どうして今回の件を私が受け入れないかもわかるでしょ」

サラ・ファイオーレは時の人。

何故なら、昨夜行われた舞踏会で王子に求婚されたから。

この国の乙女達が恋い焦がれる対象直々に求婚されて、断る娘がいるはずない。

そんな世間一般の人々の思惑に外れ、サラ本人は望まずに起きたこの出来事に、非常に困り切っていた。

「ねえ、お願ひよ。私は王子と結婚したくないの。でも、でも誰にも相談できなくて」

舞踏会での返事 자체は先延ばし出来たが、王子直々の求婚をたかが伯爵令嬢が断れるはずもない。

親に相談する事も出来ず、サラが頼った場所はここだった。

そんな親友の哀願に、エステルは何を考えているのかわからぬ黒の双眸を細めただけだった。

## 続・親友は時の人

「うあああ、と伯爵令嬢のあるまじき大口で、エステルは欠伸した。

彼女の垂らされたままの黒髪が、締め切られたカーテンの隙間から差し込んでくる日差しに照らされ、神秘的に煌めく。

エ斯特ルが無感情な眼差しでじつとこちらを見つめてきているのを感じたまま、サラは視線を逸らすことなく、その黒い双眸を見つめ返す。

ふわり、とその視線が和らいだのをサラは感じた。

「……話、聞いてあげる。だから、取り敢えず洗面台について瞼を冷やしてきなさい」

「本当！？」

がばつ、と勢い込んだサラに淡々とした視線を向けたまま、エ斯特ルは頷く。

「……うん。それより、昨日から何度か泣いたでしょう？」「こ、赤くなってる」

「こ、」の所で自身の目元を指すと、サラの頬が羞恥で赤くなる。そのまま慌てながら部屋を飛び出して行つたサラの背を見るともなしに追いかけながら、ソファの真横に置いてある鈴を振る。

親友が戻つて来た頃には、普段着に着替えていなければならぬ。

「それにしても、サラめ。また面倒事に巻き込まれて……」

エステルの愚痴が、彼女の他には誰もいない室内に零れる。  
やがて鈴に呼ばれたメイド達がやってくるまで、エステルはぼう  
つと天井を見つめていた。

## 選択肢は……？

背の半ばまである長い髪の、艶めく濡れ羽色の髪。  
煙る様な長い睫毛に覆われた、黒曜石の瞳。

何処か神秘的で氣怠氣な雰囲気を纏い、周囲を困惑させる事の多い彼女は『黒猫令嬢』と囁かれる。

それがエステル・セラーレである。

\* \* \* \*

「……つまり、これまでの話を纏めると、あんたは昨夜の舞踏会でこの国の王子に求婚された。それも第一王子に 王太子の方に」

この王国には二人の王子がいて、次の国王は兄王子ではなく弟王子に譲られる事が決まっている。

何故、兄王子の方ではなく弟の方に王位が譲られるのかについて  
は王子達の母親の身分やら何やら、色々と複雑な事情があるので  
今回は割愛しておく。

「取り敢えず、舞踏会の返事自体は保留という事で先延ばしにする  
事が出来たのだが、近いうちに返事をしなければならないという事  
実は変わらない、と」

「うん、うん。やうなの」

ふわ、と小さな欠伸をした後、眠そうな眼差しでエステルはサラを見つめる。

寝間着から普段着に着替えたといつのに、彼女の纏う眠そうな雰  
囲気は変わらない。

「今後あんたの選択肢を述べるわよ。一つ、このまま王子の求婚を受け入れ、見事王太子妃と言つ玉の輿に乗る」  
「それだけは絶対に嫌！」

「ふるふる」と高速で首を振るサラにエステルが面倒くさそうな表情になる。

『金の妖精姫』なんて、彼女が外向き用に作った分厚い猫の皮であるとよく解る姿だ。

「一つ、玉碎覚悟で王子の求婚を断り、國中から総スカンをくじらう」「それも嫌！」  
「わがままだね、サラ」「そういう問題じゃない！」

基本的に、身分が下の者が上の者（この場合は王子）の要求を断る事は、その要求の内容がよっぽどの物でない限り認められる行為ではない。

「まあ、そんな事したら後々大変な事になるよね。なら、三つ目。邪道としてはこの上無く邪道だけど、王太子に不慮の事故か何かに遭つてもらつて表舞台から退場してもらつ」

「邪道過ぎるわ！ それって要するに、いつー 言つ事じゃないの！」

「いつー のところで、くいっと右手の親指で自身の首をかき切る仕草をしてみせたサラに、エステルは舌打する。

「……普通の貴族のお嬢様はそんな仕草知らないのに」「つむさいー どうせ『妖精姫』なんて他人が勝手に作った幻想よ！」

春の空と同じ色の瞳が見る見る内に涙で潤む。

社交界での彼女の姿しか知らない者達が、今の彼女の姿を目にしたら目を剥く事間違い無しだ。

誰が知っているだろ？「可憐」だの「儂い」だの言われているサラ・フィオーレが、ある一人のためだけに作られたサラ自身の努力の結果であると。

「私が『金の妖精姫』とか恥ずかしい渾名で呼ばれるまで、淑女として努力したのは少しでも“あの人”の側に立つても相応しい相手になるためなのよ！ それなのに、それなのに“あの人”でもない相手に、例え王子様だからって求婚されたって全然嬉しくないっ！」

「あ。恥ずかしいとか思つてたんだ」

「当たり前よ！ 自分が妖精とかいうキャラじゃないのは私が一番知つているものっー！」

その台詞は、この場所が入念に人払いされた場所であるからこそサラが言える本音だろう。

儂さとかそう言つた物が綺麗に消え失せた表情でサラが唸る様に咳ぐ。

「私としてはなんであんたがそこまでアレに夢中になれるのかが知りたい所だけど……。いつその事、思い切つてアレに告白でも何でもしてみれば？ もしかしたら駆け落ちでもしてくれるかもよ？」

「……そんな事、出来ないわよ。お父様やお母様に迷惑になる上に、私にはそれほどの力はないもの……」

選択肢四は、ロマンチックでこそあるが、現実的に考えても実現不可能だ。

生まれた時からかしづかれて生きて来た貴族の令嬢が、それまでの生活を捨てて庶民の暮らしに馴染める筈が無い。それこそ、よっぽど特殊な環境下で育つていない限り。

サラは強いが、そう言つた逞しさとは無縁な娘であると知つてゐるからこそ、エステルはそれ以上何も言わなかつた。

「ならこれしかないね。 王子の方から、今回の件は断つてもうう

涙で濡れた春の空の瞳が、不思議そうに瞬いた。

## **選択肢は……？（後書き）**

サラ嬢は努力の人。  
ほんとは『妖精姫』とかいうキャラじゃない。

## 思いついた手段

『黒猫令嬢』と周囲から囁かれる親友の言葉に、サラは何度も目を瞬かせた。

「王子の方から断つて頂くつて、求婚を避けるための手段としては最良だけど……そんなに簡単に断つて頂けるなら最初から求婚なんてされないんじゃないかしら？」

「まあ、サラの言ひ事は最も。だけど、あんたが家の名譽も自身の名譽も傷つけずにこの件を無かつた事にするには、王子本人からの拒絶が必要」

それに、とエステルはサラを見つめた。

「そもそも、王子があんたを名指ししたのは、あんたが王子の理想の結婚相手としての条件を全て満たしていたからだつて」「理想の結婚相手！？」

がたつ、と椅子から身を起こして立ち上がった親友に田で席に座る様に促しながら、エステルは言葉を紡ぐ。

「見目麗しい、金の髪の可憐な乙女。性格は控えめで、でしゃばつたりしないけど、芯のある気丈な子」

「は？」

「今までの第一王子の女性遍歴を探つた挙句に出て来た、王子好みの女性像」

大勢の前での求婚、という力技に出たのはサラが初めてだが、理想の男性として国内の女達の間で人気の第一王子はこれまでに幾度

か浮き名を流していた。

そうして、王子とそつ言つた関係になつた女性達の情報を統合し、  
出て来たのが以上の条件であつたのだ。

「その法則で行くのなら、あんたは正しく王子のストライクゾーン  
だね」

「いやあああああーー！」

びし！ と言い放つたエステルの言葉に、サラが奇声を上げる。  
彼女にしてみれば悪夢でしかないだろう。

王子と言えど、これまでに歯牙にもかけなかつた相手に目をつけ  
られる事になつた最大の原因が、彼女が長年努力して作り上げて來  
た淑女としての自分であつたのだから。

「いやよ、いやよ、ぜえつつたにいや！ 只でさえ嫌だったの  
に、それ聞いてますます嫌になつちやつたじやないーー！」

「サラ……」

「それつてつまり、王子が私の上つ面だけで好きなつたって事じや  
ないーー！ 確かに恋愛する上で顔は重要だとは思ひナビ、だからつ  
て……！」

ぐすぐす、と泣き出し始めた親友に手巾を渡すと、遠慮なく鼻を  
かまれた。

猫を被る必要が無いとは言え、今の姿を見て、この泣きべそをか  
いでいる娘が社交界の花である『金の妖精姫』サラ・フィオーレで  
あると氣付く者達がいるのであらうか。

「……それだ

「ひっく、なあに、どうしたのエステル？」

不意に、爛々と夜空の様な黒い瞳を輝かせ始めたエステルに、サラが怪訝な顔になる。

「ねえ、サラ。あんた、今回の求婚はなにがなんでも断りたいんでしょう？」

「ぐすつ、うん、うん、そうだよ」

「その願い、叶えて上げるわ」

「…………ほんと？」

目を真っ赤にさせ、臉を赤く腫らしたサラが顔を上げる。  
期待のこもった春の空の瞳に向けて、エステルは見る者を魅了する妖しい笑みを浮かべてみせた。

「ええ」

「どういう風の吹き回しか、訊いてみても良い？」

「単なる気まぐれよ。それ以上でもそれ以下でもないから気にしないで」

すんすん、と鼻を鳴らす親友の視線を受けながら、エステルは窓の硝子戸を通して王城の方へと挑む様な視線を投げかけたのであった。

## 思いついた手段（後書き）

次話ではセラーレ伯爵家の人々について述べたいと思います。  
サラ嬢は少しばかり退出。

## 伯爵家の人々（前書き）

お気に入り登録をして下さった皆様、ありがとうございます。

## 伯爵家の人々

セラーレ伯爵家人間は、明るい色彩を持つ人間の多いこの王国の貴族の中では少数派の黒目黒髪の人間ばかりだ。

時偶、セラーレの家名を名乗つてはいても、明るい色彩を持つ人間がいれば「ああ、この人はセラーレの家に嫁いだ（あるいは嫁入りした）のだな」と即座にバレる程、セラーレの血を引く者は黒目黒髪を持つて生まれて来た。

そして伯爵家の者達も少数派である自らの暗い色彩を貶める事はせず、寧ろ黒目黒髪で生まれて來た事に誇りを持つ。

その誇りは、セラーレの者が成人する際、一族の者から認められれば『黒』を冠した自らの“名”を堂々と名乗る事を許されるという事例からも明らかだった。

\* \* \* \*

「 少々、お時間を頂けますか？ お父様、お兄様」

一家団欒の時間。

夕餉の席で、エステルは銀の匙を置くと、目の前で優雅に食後のパンナコッタに舌鼓を打つ家族達へと声をかけた。

「なんだい、エステル？ 何を改まっているんだい？」

目を細め、柔軟な微笑みで答えたのは次期当主であるエステルの兄・イサク。

伯爵家の証とも言える黒髪を白のリボンで後ろに括り、朔の夜を思わせる黒い瞳の青年である。

「まあまあ。その話にお母様は必要ないのかしらん?」

おつとつと、息子そっくりな優し気な微笑みを浮かべ、悲しそうに頬に手を当てたのはエスティルの母であり、伯爵夫人であるマリア。華やかに結い上げられた赤茶色の髪に深い翠玉の瞳。

彼女は他所からセラーレ伯爵家に嫁いで来たため、その身に黒を宿していない。

「…………それで? 何の用だ、我が娘よ」

重厚な響きを宿すゆつたりとした抑揚の声で応じたのは、伯爵家当主であり、父のアベル。

切れ長の少々吊り上がり氣味の漆黒の瞳は真っ直ぐに、娘の姿を映していた。

「申し訳ありません、お母様。今回の事は『黒』に関わる事でして」「あら。それなら仕方ないわね」

軽く頭を下げて謝罪した娘に、母は何度も瞬かせる。同時にそれを聞いた兄と父親が、揃つて視線を険しくした。

「心意気は立派だけどね。お前にはまだ、早いのでは?」「イサクの言つ通りだ。すまん、マリア。少し下がってはくれないか?」

「もう。折角面白くなつて來たところのこ。こいつ時、いつも私は仲間はずれなのだから」

口では不満を口こしながら、マリアは逆らひ事無く召使い達を連れて部屋から退出する。

母が出て行き、自分達の他には誰もいなくなつた室内で、再びエステルが口を開いた。

「 親友のサラが面白い話を持つて来てくれました。聞いて頂けます？ お父様、お兄様？」

「ふうん。サラちゃんがねえ……。ボクの想像通りなら、中々愉快な事になりそうだね」

「 そうだな。話してみると良い、エステル」

エステルの言葉に、兄は口角を持ち上げ、父は獰猛に笑つてみせた。

## 伯爵家の人々（後書き）

お気づきの方はおられるでしょうか？  
実はこの作品の登場人物の名前は、とある書物に登場する人物から  
取られています。

『黒』

セラーレ伯爵家に属する人々は、良く言えば個性的、悪く言えば奇人変人と呼ばれる者達である。

それ故に、と言つていいのかは分からぬが、この一族には代々伝わる特殊な伝統が存在する。

その伝統は一族の間で『黒』と呼ばれている。

\* \* \* \*

「エステル。キミは今年で幾つになつたけ？」

「十七です、お兄様」

「ふうん。十七か……。ボクが『黒』の儀式を受けたのは今から二年前。丁度十九の時だつたけど?」

「何が言いたいのですか、お兄様」

「正直言つて、早いと思うよ」

一二一と微笑みながら、聞いていて嬉しくない事をさらり、と口にするこの兄は本当に性格が悪い。

貴族の中でも、この兄がさり気なく口にする厭味にも気付かない者が多い程、あまりにも自然に毒を吐くのだ。

「氣の毒なサラちゃんの話はボクの耳にも届いているよ。その上で聞くけど、エステル、キミは彼女に協力する氣かい?」

「そのつもりですが、お兄様」

「意思が固い事。父上、どうします?」

腕組みをして、黙考する様に目を瞑っていた父にイサクが声をかける。

「エステル

「はい、お父様」

「お前は『黒』の重要さを分かつておらずにその事を口にしているのならば、今すぐこの話は無かった事にしなさい。『黒』を冠するための儀式はセラーレの人間の一生を左右する程、大事な物なのだから」

「だからこそ、です。お父様」

にこり、とエステルが微笑む。

常日頃から眠たそうな顔をしている彼女が、一度微笑みを浮かべるとそれだけで周囲は彼女から田を離せなくなる程の引力を発する。

「サラにとつても、今回の事は彼女の一生を左右する程大事な事。その彼女を助けると私は言いました」

普段は完璧な淑女として猫を被ついても、あの金の髪に春の空の瞳をもつ親友は根はとても真っ直ぐだ。

そんな親友が長年想い続けた相手ではなく、別の相手と無理に結婚しなければならない事態に陥っている。

ここで自分が彼女を見捨てたら、親友は自らの心と周囲の期待、そして望まずに得た地位に翻弄される一生を送る事となるだろう。

「サラの今後の人生を賭けた戦いです。その協力者である私も、同じだけの物を懸けなければ彼女に対しても失礼でしょう。自分だけが安全な場所にいるなんて」

善くも悪くも『黒』はセラーレの人間の一生を左右する。

これで本当の一蓮托生だ。

妖艶に笑つてみせたエステルに、イサクは口を噤み、伯爵は重々  
しい溜め息を吐いた。

## 『黒』（後書き）

『黒』についての説明は次の話です。  
サラ嬢、再び登場です。

「『黒』の儀式を受ける事にしたつて聞いたわ！ 何を考えているの、エスティル！？」

翌朝、部屋に入つて来て早々、叫んだのはサラであった。よっぽど急いで来たのである。

普段の猫かぶりはどこにいったのか、普段は綺麗に纏められている月光を紡いだ様な金の髪は所々乱れている。淑女にあるまじき振る舞いだ。

「随分と、朝早いね。 それより、外に音が聞こえるから早く扉閉めてくれない？」

やはり寝間着のまま親友を迎えたエスティルが、寝台の上で転がりながら指示する。

色々と言いたい事があつた様だったが、サラは黙つてそれに従つた。

「……それで？ 誰から聞いたの？」  
「イサク兄さまからよ」

三歳の頃からの付き合いだからか、サラはエスティルの兄であるイサクの事を兄と呼ぶ。

イサクの方も、サラの事をもう一人の妹の様に昔から可愛がつていたのだが、面倒な真似を。

「兄様も余計な事をしてください……」

令嬢にあるまじき事に、エステルが舌打するが生憎此処にはサラしかいない。

普段であれば注意する立場のサラであるが、今回ばかりはそこまで気が回らなかつた様だ。

「ねえ、お願ひだから考え方直してよ、エステル。『黒』の儀式はセラーレの家に属する者として最も大事な物でしょう？　本来ならば十七で受けられる様な簡単な儀式ではない筈よ」

「……サラ。『黒』『黒』と言つてているけど、それがどんな物なのか、あんたはどこまで知つているの？」

「詳しくは知らないけど、セラーレの人間の一生を左右する程大事な儀式なんでしょう？　間違つていい？」

恐る恐る、といった風情の親友の言葉に、エステルが默考する。春の空を映した瞳が不安そうにエステルの姿を見つめている。

「本当は、外部の人間に教える事は良くはないんだけど。この際は……まあ仕方ないか」

考え込んだのも一瞬の事。

あつさりと一族の秘事に関わる事への判断を下し、寝台に転がつたままエステルはサラを何を考えているのか分からぬ無機質な眼差しで見つめ返す。

「大変だ、重要だ、とかいつているけど、そんなに鬼気迫る物じゃないよ。『黒』は

『じりり、と転がつて、天井を仰ぐ。

「簡単にいえば、セラーレ流の“成人の儀式”だよ」「“成人の儀式”……それが『黒』の儀式なの？」

幼子の様にエステルの言葉を繰り返したサラを、天井を仰いだまま横目で見やる。

ほどけた金色の髪がはらり、と落ちた。

「セラーレの一族にとつて自らの黒目黒髪を誇りの証。私の兄と父の呼び名をあんたも一度は聞いた事があるでしょう？」

「叔父さまは『黒獅子』で、イサク兄さまは『黒狐』でしょう？」

それにエステルが『黒猫』

「私の『黒猫』は単なる渾名。あだな呼び名じゃないの」

微かな衣擦れの音を立てながら、サラが寝台に近付く。右手で寝台を叩いて、そこに座るよう促した。

「『黒』とは一族の者が成人するための、セラーレの家のみに伝わる風習。黒目黒髪のセラーレの人間が適齢期に近付いたら、一族の年長者からそれぞれ“試練”が与えられる。それを見事制し、成しえた者は周囲から大人として認められるの」

「なんだ、なんか拍子抜けしたわ。って事は、イサク兄さまや叔父様の呼び名は、二人がセラーレの人間として成人した事を示しているの？」

「まあ、そう言う事かな？」

はて、とサラが首を傾げる。

「でもそれなら、今回の王子殿下の求婚とエステルの成人式がどう関わってくるの？」

『それにはボクが答えようか』

扉の向こうから響いて来た聞き覚えのある声に、エステルは思々し氣に寝台の上に起き上がって、再度舌打した。

「蓮托生へ中編」

「やあ。朝早くからわざわざ来てもらひて済まないね、サラちゃん。いつも愚妹がお世話になつてゐるよ」

「朝早くから淑女の部屋に押し掛けて何を言つてゐるんだ、愚兄。うさんくさい顔で笑つてないでとつとと出て行け」

自称・淑女な妹の言葉に、兄のイサクは飄々と笑つ。

兄妹の毒の吐き合いで巻き込まれたサラが、おろおろと睨み合つ二人へと視線を移す。

「やあ、エステル。今日も今日とて朝っぱらから」機嫌斜めだね。昨日の晩はあんなに素敵だつたのに」

「余計な事言つてないで、さつと退散しやがれ『黒狐』。悪いがあんたはお呼びじやない」

淑女としての言葉遣いもかなぐり捨てて、エステルが毛並みを逆立てた猫の様に唸り声を上げる。

サラが見守る中、イサクは乾いた笑声を上げた。

「やれやれ。エステル、キミは昔から自分に都合が悪い事があると途端に口が悪くなる癖は変わらないよね」

「はっ！ 何を嘯ぐ、愚兄。都合の悪い事なんかある訳ない」

「本当に？」

イサクの目が狡猾な光を宿す。

突き刺す様な口調に、僅かにエステルの肩が震えた。

「では聞くけど、キミは親友のサラちゃんに嘘をつくんだ？」

「え……？」

「嘘なんかついてない！！」

先程までの氣怠氣な雰囲気は綺麗に消え失せ、寝台の上に起き上がったエステルが一喝する。

豹変した親友にサラが肩をびくり、と揺らすが、一喝を浴びた方の兄はますます笑みを深めただけだ。

「そうだね。厳密にいえばキミは“嘘”はついてない。……言つてない事はあるけどね」

「どういう事、エステル？」

押し黙つたエステルに変わつて、イサクが答えた。

「『黒』が單なる成人の儀式だつて？ 笑わせる。友人を困らせたくないなかつたキミの気持ちは、まあ……分からなくもないけど、随分と残酷な友情だ」

母・マリアに似た、優し気な容貌が奇妙に歪む。一瞬だけ、イサクを獰猛な気配が包んだ。

「確かに『黒』は一族の成人式としての役割も持つ。でもね、サラちゃん」

春の空の瞳を大きく見開き、声もでない少女にイサクが何処か獸めいた微笑みを向けた。

「く試練＞に成功すれば、ボク達は正式にセラーレの人間として認められ、有事の際には意見を述べる事も許される様になる。人間として考えうる範囲での自由が与えられる。例えば、新しく事業を始

めたり、はたまた国を出て好きな所に行つて、他所の国に仕える事  
だつて咎められはしない」

普通の貴族であれば、生まれた王国の中で一生を過ごす事が当たり前とされ一族の人間に外へ行く事を勧めない風潮が強い中、国外へ行く事を許すセラーレ伯爵家は異端であつた。

でもね、トイサクが笑う。

「人間としての最大の自由が認められる一方で、もしも＜試練＞を合格出来なかつたセラーレの人間はどうなると思うかい？」

「どうなるの、ですか？」

「……一切合切、人間としての自由と権利を剥奪され、セラーレの人物にされる」

震えるサラの声に応じたのは、エステルであつた。

先程までの威勢はどこにいったのやら、寝台の上に再び寝つ転がつて不貞寝していた。

「それって、過激すぎるんじゃないの？ その、成人の儀式としては」

「この習わしを作つた初代が、無能嫌いの苛烈な人間だつたからね。自分の子孫と言えど、この程度の＜試練＞をぐぐり抜けられない程度の人間ならいらないって事らしい」

それを実際に実行しているボク達が言つのもなんだけどね、トイサクが苦笑する。

「＜試練＞は年長者から与えられる物と、＜試練＞を受ける者が自ら選択するタイプと二つある。そこの愚妹が『黒』を申請する際に

選んだ「試練」は、サラちゃん、キミの婚約破棄だ

「……！」

むつすり、と不機嫌そうなエステルを見やるが、結局サラは何も言えずに押し黙る。

「王族の面子を潰さずに王族からの求婚を断るんだ。並大抵の事じゃ出来ないよね？ 他人事として言わせてもらうなら、正にく試練へに相応しい課題でもあるよ」

「ひむわこべ、愚兄。余計な事ばっかり教えやがって……」

くつくづくと愉快そうに喉の奥で笑声を立てる兄を睨みながら、エステルがふてくされる。

「そういうわけだ、サラちゃん。昨晩、エステルの申し出は一族の年長者の審議を経て、エステル・セラーレのく試練くとして正式に認められた。もしキミが今後王子に心変わりしたとしても、そこでの愚妹はキミと王子の婚約話を全力で壊しにかかるから安心しなよ」

好き勝手言いながらイサクが部屋から出て行く。

その後姿に向かってエステルが枕を投げつけるが、寸前で扉を閉められてしまった。

「全く。ビニから聞いていたのやら。我が兄ながら性格の悪い……」

寝台から抜け出して床に落ちた枕を拾う。

その背をサラが物言いたい気な視線で見つめていた。

—蓮托生へ中編へ（後書き）

なんかかなりシリアスになりました。

サラ・フィオーレには忘れられない思い出がある。

まだ物心ついて間もない頃、三歳からの親友にして幼馴染の工ス  
テルと二人、童話を読んでいた時の事。

いくといつ幸せな結末の恋物語。

た一言は、幼いサラに多大な影響を与えた。

\* \* \*

「全く……。イサク兄様も余計な事ばっかりしてくださいで……」  
「……………エスティル」  
「こつちは起き抜けでまだ頭もはつきりしないのに……」  
「……………エスティル」  
「ふわ……。それにしても、眠い」  
「エステル！」

さっきまでの剣幕をどこに捨て置いたのか、眠たそうなり、とした田でベッドに潜り込もうとするエステルにサラが大声を上げた。

焦点の合わさっていない茫洋な眼差しがサラを見つめ返す。

「嘘つき。ただの成人式だなんて言って……。どうして誤

摩化そうとしたの」

一あれは……イサケ兄様の質の悪い冗談だよ！」

「馬鹿にしないでよ、エステル！ 確かに私は助けて欲しいとは頼

んだけビツ……」

サラの中で悔しさとか慘めさとか、色々な感情が混ざりあって、どうしようもない気分になる。

「こんなっ……！　たかだが私がされた求婚ごときには、なんでこんな大事な事を……！」

自分でも何を言いたいのか、分からなくなつて、ぼろぼろと涙がこぼれる。

大きな溜め息の音がして、握りしめていた右手を優しく取られた。

「第一、意味分かんないっ！　昔からエステルは私に言つていたじゃないっ！！　こつ、恋だの愛だのくだらない、つて！　そーいうのは、一時の氣の迷いだとか何とかつ！」

どんなに素敵な恋物語を読んでも、ロマンチックな恋愛を題材にした御芝居を観劇しても、この黒田黒髪の親友はいつもまらなさそうにしていた。

「さつ、散々、私の恋の事も馬鹿にして来たのにう、なんでいまさらここまでくるの？！？　わ、訳分かんないよつ！」

父にも母にも内緒にしているサラの好きな人。  
知っているのは話した相手はエステルだけで、それなのにこの親友は止めもしなかつたけど、応援もしてくれなかつた。

「ひつぐ、ひつぐ。エ、エステルのばがあ……。こ、恋なんか一時の錯覚にしか過ぎないと、偉そうにいつでいだぐせに……」

わんわん、と身も蓋も無く泣きわめくサラの右手を優しく引っ張つて、ベッドの上に座らせる。

一人分の体重を受け、ベッドが柔らかく弾んだ。

「まあ……。正直、今でもそう思つていいよ」

「な、なら、なんでえ」

「見て見たくなったから」

「ふえ？」

真摯な輝きを宿した夜空の瞳が、春の空の瞳を射抜く。

『黒猫令嬢』はゆつたりとした柔らかな微笑みを浮かべた。

「私が散々馬鹿にして来た恋愛に、いつでもあなたは一生懸命だったから」

「」の泣き虫な親友は、自分が取るにたらぬ事と見放していた恋にいつも一生懸命で。

ただ一人を見据えて、相手に声をかけられるのを待つのではなく、ひたすら自分自身を磨き続けて。

そして、その努力の結晶が『金の妖精姫』サラ・フィオーレ。

一国の王子でさえ魅了した完璧な淑女へと、彼女は立派に変身したみせた。

「だから、見て見たくなった。あんたが本当に、想いを貫く事が出来るのかどうか」

乾き切った自分とは違い、生き生きと花を咲かせた親友。

散々馬鹿にしてはきたけれど、今では立派な淑女に変身してみせ

た親友が想いを成就する場面をいつか目にするのが楽しみだつた。

「ほ、本当に……？」

「ま。正直あんたの片想いの相手はどつかと思つてはいるけど……」

途端、再び涙を流し始めた親友の涙をそっと拭う。

「それにあんた、そこまで器用じゃないでしょ？　ずっと好きだつた相手を諦めて、どうでも良い相手と結婚して、欲しくもない地位や名譽、余計な嫉妬に苛まれる一生を送れるほど強くもないし」

「この国の王太子妃、引いては未来の国王妃となつて得られる物は沢山ある。

女性としての最大の栄誉や豪奢なドレスで着飾れる一生、きらびやかな人々にかしづかれ欲しい物を手に入れる事の出来る権力。

それらを補つてあまりある程の人々の負の感情も。

「ここでサラが王子に好意を持つていたのであれば、それらに打ち勝つ事も可能だろうが、しかしながら現実はそうではない。

「この勝負に負けたら、あんたは好きでもない相手と結婚して、欲しくもない重責を背負わされる羽目になる。私はそんなあんたに協力すると言つた」

エスティルの迫力に押された様に、サラがコクリと頷く。

「あなたの一生を賭けた戦いよ。それに値する物を私も懸けなきや失礼じやない」

自分が安全な場所について、そのくせ助言だけを寄越すなど、エ

ステルの誇りが許さない。

協力すると宣言したならば、自分もサラと同じ土俵に立つべきだ。

都合が悪くなつてから、他人事だと言つて逃げ出す事は絶対にしない。

「良い事？ これであんたと私は文字通り一蓮托生。私だってセラーレの人形として一生を送る羽目に陥るのは御免被るわ。何が何でも、この求婚断つてみせるわよ」

「…………うん。ありがとう、エステル」

親友の頼りがいのある宣言を受け、漸くサラは笑みを浮かべた。

—蓮托生へ後編へ（後書き）

取り敢えず、第一部は完結。

第一部から本格的に動き出します。

## 幕間・伯爵家の人々

「 それでは、昨夜申請のあつたエステル嬢の『黒』のく試練はサラ・フィオーレ伯爵令嬢と王太子殿下との婚約破棄という事で確定じゃな？ 異論はあるかの？」

薄暗い部屋の中、重厚な檻作りの円卓に五人の人影がある。身なりも格好も、性別も様々な人間達であったが彼らは全員一つの共通点を持つていた。

「構いませんわ」

まず最初に言い放つたのは、官能的な響きの女の声。

「了承した」

続いたのは冷徹な印象を聞く者に与える男の声。

「ふふ。あの子がどこまでやれるのか、とつても楽しみだね」

愉快そうに呟いたのは、何処か毒のある青年の声。

「……致し方あるまい」

最後に、苦味の混じった声が渋々と同意する。

「諸卿に異存は無い様だな。では、ここに五卿の名の下に『黒』の儀式の開始を承認する」

五人の人影の中で最初に口を開いた、年老いた声が重々しく呴くと、残りの四人が一斉に頷いた。

彼らが頷いた途端、どこか重たい沈黙が室内を漂う。

「それにしても、恋愛をあんなに嫌っていたエスティルちゃんがねえ……」

そんな空氣を払拭する様に、女の声が呟く。

他の四人が苦笑する雰囲気が、空氣を壊しかせた。

「ボクとしても意外でしたよ、叔母上。あの怠惰で面倒くさがりやな妹がこんな事を申請するなんて」

「イサク……」

毒を孕んだ軽やかな声がそう言い放つと、苦味の混じった声が渋い声へと変わる。

「それにしても、よくもお前達が受理したものだな。何故止めなかつた……？」

少しばかり不思議そうに、怜俐な声が訊ねかける。

答えたのは、女の声だった。

「あら。あたくしにしてみればさすがは我が姪御と感心こそすれ、止める様な野暮な真似は致しませんわ。殿方はお疑いでしようけど、女の友情は脆くもありますが、強固な物は殿方に引けを取りませんのよ?」

「それは女であるお前の意見なのか?『黒蝶』よ

「当然でございますわ、当主様」

女の声がしつとつとした艶を増す。

「『黒狐』、お前でも十九の時に受けた『黒』の儀式であるといふのにのう。エスティル嬢は何を考えているのやう」

年老いた声が悄然と溜め息を吐く。

それを打ち破る様に『黒狐』は、からからと笑声を上げた。

「さあ。案外何も考えていないかもしませんねえ。なにせ、気まぐれな『黒猫令嬢』でござりますから」

「やはり、早すぎたのであるつか……」

「らしくないぞ『黒獅子』。戦場でのお前はどうこいつた?」

『黒狐』と違い、沈んだ空氣をそのまま声に移した様な苦々しい声の独り言を冷淡な声が齧める。

「動機が何であれ、エスティルは道を選んだ。『黒』の儀に成功して見事『黒』の称号を冠するのか、はたまた『試練』に破れセラーレの人形となるかは、全てあの娘の力量次第」

「ほつほ。『黒蛇』の言つ通りじゃて。戦の折りは無敵を誇る『黒獅子』も、愛娘には弱いようじやな」

年老いた声が好好爺然と笑う。

それを最後に、黒い目と黒い髪と言つ共通点を持つセラーレの一族の人々は、沈黙したのであった。

計画は現実的に（前書き）

第一部に入ります。

## 計画は現実的に

サラ・フィオーレが王子に求婚された舞踏会から、三日目。エスティルが親族から『黒』の儀式の許可を受けてからは、一一日目の日。

一蓮托生となつた少女達は、エスティルの生家・セラーレ伯爵家の内庭の四阿にて額を付き合わせていた。

\* \* \* \*

「ああ……。ぢりじょひ、ぢりじょひ。もひ」れ以上、王子へのお返事を引き延ばせない……」

「うるさい。こっちは本を読んでいるから暫く黙つて」

白亜の大理石で作られ、柱の至る所に青々とした蔓草の絡み付いた瀟洒な四阿の中。

月光を紡いだ様な波打つ金の髪に春の空と同じ色の瞳を持つ少女はブルブルと震え、その傍らの濡れ羽色の黒髪に夜空の瞳を持つ少女は淡々と本のページを捲つていた。

「う、うるさい、うるさい、ひどいわ、エスティル！」

「騒ぐ暇があつたら、本でも読んでなさい」

純白のテーブルの上に積まれた本の山から一冊取り出すと、サラの方へと放る。

突然放られたにも関わらず、投げつけられたサラの方は、それを危なげなく受け止めてみせた。

「もう、エステル。私だつたから良かつたものの、他の貴族のお姫様達にこんな乱暴な真似をしてはダメよ」

「……ふわあ」

つん、と桃色の唇を尖らせてサラが寝めるが、退屈そうにエステルは生欠伸する。

そうしてパラパラと捲っていた本を脇に置くと、今度は右手を伸ばして薄い冊子を引っ張り出した。

「ねえ、エステル。これからどうするのか、教えてくれない?」「

「ん。取り敢えず、第一の田標は正式な婚約を先延ばしにする

『結婚のススメ』と銘打たれた薄い冊子を退屈そうに捲りながら、エステルは答える。

「あんたが舞踏会の夜に返事をしなかったから、今の所あんたと王子との間に正式な婚約は結ばれていない。それは分かる?」「う、うん」

「ぐーぐー、と必死にサラが頭を振る。

エステルは薄い冊子を横に放ると、今度は『婚約前の淑女の嗜み』というタイトルの分厚い本を開いた。

「正式に婚約が結ばれていない、という現状は私達に取つて非常に有利な状況よ。周囲がいくらあんたを王太子の婚約者として扱つたとしてもね」

『正しい求婚の受け方について』と書かれた章を飛ばし、ページを更に進めるエステルの横で、サラがぎゅっと拳を握りしめていた。

「取り敢えず、第一にすべき事は何が何でも正式な婚約を結ばせない事。もし、されでもしたら、その時点で私達はかなり困った事になるからね」  
「で、でも……。今だつてギリギリなのに、これ以上延ばすだなんて……」

弱音を吐いたサラに、エステルは本へと落していった視線を持ち上げ、春の空の瞳と視線を合わした。

「そうだね。  
なさい」  
だからひとまず、あんたは王子に会いに行き  
「へ？」

間抜けな顔をしてエステルを見返すサラに、エステルはあくびいとしか評しようのない笑みを浮かべてみせた。

「……いつ時に使える、とつておきの台詞があるじゃない  
「は？」

何がなんだか分からないサラに、エステルは渡した本を見る様に指示する。

手の中の本のしおりが付けられた箇所を開いて、赤い線が引いてあつた行を目にして、サラの瞳に理解した色が浮かんだ。

「その台詞を、王子の前で言いなさい。上手くいけば、時間を引き延ばす事が出来るわ」

そうじて微笑むエステルの顔は、やつぱりあくびかつた。

その晩、痺れを切らしたらしい王宮より、サラ・フィオーレ嬢宛に招待状が届いた。

普段よりも念入りに化粧を施させ、波打つ月光を紡いだ様な金髪をきつちりと結い上げたサラを見送ったエステルは、生欠伸を噛み殺した。

どこか間の抜けている親友を一人だけで夜会に送り出すのは正直不安だったが、エ斯特ル宛に招待状が届いた訳ではないので致し方あるまい。

まあ、一応策は授けておいたし、正直猫を被つている状態のサラはそこらの貴族の娘を束にしたところで敵う様な柔な娘でもないのでは、今回は見送るに留めた。

しかし、これから先もあの親友の側に付いておけないのは困るので、今後王宮からの招待状が届く様にと手を打つておいた。  
流石にこの時ばかりは、今までの自分のずぼらさを恨んだが、元来自分はサラと違つてああいつた華やかな席は好きではない。

あんな夜遅くまである不健康まつしぐらなパーティーに出席するよりは、邸の素晴らしい寝台の上で夢の世界に旅立つ方がよっぽど有意義だ、と常々エ斯特ルは思っている。

しかし、『黒』の儀を受けた今となつてはそうもいかない。

いつもだったらとっくに眠りに就いている時間であつたが、今夜のエ斯特ルは柔らかな寝台の上ではなく、固い椅子の上に座つて書

物のページを捲っていた。

『結婚のススメ』『正しい求婚の受け方』『夫婦円満の百の秘訣』

『古より伝わる礼儀作法』『結婚編』などなど、邸内の蔵書室から持つて来た本を読みふける。

……持つて来た書物の中には『これで貴方も立派な悪女 パート1』など、何処か間違つた題の物もあつたが。

「そりそり、サラが帰つてくる時間かな……」

書物に没頭していたエステルが不意に頭を持ち上げ、部屋の隅の柱時計を眺める。

夜遅くまで続けられる夜会であるが、未成年であるサラはこの時間には基本的に退出する。

ちらり、と手元の書物に視線を落す。

身分違いの愛に苦しみながらも、お互いに手と手を取り合つて家を飛び出した男女の恋愛を扱つた、どこの国にもありそうな恋愛小説だ。

以前、この本を読んだサラが「とっても素敵な話なの!」と言つてみたから読んでみたのだが、正直言つてつまらなかつた。

使用者の娘に恋をして娘と駆け落ちした貴族の青年の心も、貴族の青年との許されぬ恋の葛藤に悩み続けた娘の心情も、全くと言つていい程理解出来ない。

娘を一生の伴侶として迎えたいと思う程相手の事を欲するのであれば、そのために努力でも策略でも行えればいいのだ。

青年への思いが断ち切れないと思うのであれば、さつさと別の仕事に就くなどして離れればいいのではないか。

勿論、エステルの考えついた手段とて生半可な道ではなかろう。しかし、駆け落ちをして全てを放り出すよりも、容易い手段であるのは間違いない。

眠たい頭でそんなことを思い、側に置いてあつた蠅燭の火を吹き消した。

親友は戦場（後書き）

ある意味、健康優良児工ステル。

## 先延ばし作戦の結果

「やった、やったわ、エステル！ 上手く行つたわっ！…」

朝遅くまで惰眠を貪っていたエステルは、親友のはじめにましやいだ声によつて叩き起こされた。

寝ぼけ眼に、月光を紡いだ様な波打つ金の髪とキラキラと輝く春の空の色の瞳が映る。

「……………サラ？」

「さつよー、聞いて、エステル！ 言われた通りにやつてみたの、そしたらねっ！…！」

興奮を隠せない親友の姿を尻目に、再度エステルは夜空の瞳を閉じた。

「五十分後に起こして……」

「ちょっと、エステル！ 一度寝なんかしないでよー。」

もともと、と再び寝具にぐるまつたエステルから、サラが乱暴に寝具を引き剥がした。

\* \* \* \*

昨夜の夜会に招かれたサラは、親友であるエステルに教えられた言葉を胸に王城の門をくぐった。

「夜会が始まつて、暫くしたらダンスが始まつひやつて少し焦つた

けど……」

エステルの寝台の上に、団々しくも腰を下ろしたサラが一コ一コとした表情のまま、昨日の出来事を振り返る。

その横ではどこかぼーっとした虚ろな表情のエステルが、枕を抱きしめた格好で座り込んでいた。

「いつもと違つて、誰も誘つてくれなかつたから焦つたけど音楽が始まつた途端、第一王子が来られてね。そのまま、三曲くらい一緒に踊つたかな?」

「それで? ダンスが終わつた後に、バルコニーにでも誘われた? 「うん。エステルが予想していた通りだつたよ。私としては他所のお部屋に招かれるよりも助かつたけど」

内密の話をする場合は他人の邪魔が入らぬ場所で、といつのほどこの世界でも鉄則だ。

内庭に張り出した王宮内のバルコニーか、普段はあまり使用されていない夜会の会場に近い一室のどちらかで王太子がサラとの会話を望む事は予測がついていた。

「…………で? また求婚されたんでしょ?」

「“前回は色よいお返事がいただけませんでしたので、今回こそは……”とか言つてらしたわ。まあ、あの日の舞踏会で何も言えずに逃げ出したのは確かだつたし」

しゅん、とサラの顔が曇る。

「でも、まあ……ふわあ。今回はあんたのその間の抜けた行動が役に立つた訳だ。男に慣れていない初心な伯爵家の妖精姫というイメージが王子の中で固定されたのは間違いないだろうしね」

「ええ。だから言つてあげたわ」

サラの脳裏に、昨夜のバルコニーでの一件が描き出される。

自分よりも背の高い王子の方を向いて、意識して好きで  
もない相手に上目遣いになつて……

「“私、殿方とのお付き合いは初めてですの。ですからお友達から  
始めませんか？”って、ね！　あああ！　自分でやつた事ながら、  
物凄く鳥肌が立つううつ……！」

「グッジョブ、サラ」

ぐい、と無表情でエステルが親指を立てるが、サラは鳥肌のたつ  
た一の腕を擦り続けた。

「私の事ながら、なんなのあの甘つたるい媚を含んだ声！　あああ、  
あんなの私じゃないのにいいいつ！」

「ちゃんと言つた様に、ココアの中にシロップと砂糖と蜂蜜を足し  
た様な声で言つてのけたのね。偉いわ、サラ。このぶんだとついで  
に、上目遣いとスカートの裾を左手で掴んで右手は胸の前、つてい  
うポーズも無事にやれたみたいね」

「あ、穴に埋まつてしまいたい……。もうやだ、あんなふりつ子み  
たいなのは……」

「それで上手くいったから良かつたじゃない」

ふわあ、と眠たそうな吐息を吐きながらエステルが目を擦る。  
昨晩の自分の演技に鳥肌を立てながら、サラは頭を抱えた。

「さすがの王子も一瞬だけ固まつてたわ。すぐにこじやかな顔に戻  
られたけど」

「まあ、どこの夢見がちな乙女だよ、って突つ込みたくなるような

事をしてのけたからね」「

少し頭の足りない子、と思われたのは確實だらう。  
しかし、それこそがエスティルの狙いだつた。

「これで、あの王子殿下があんたに抱く関心が少し減つたのは間違  
いないわ。その証拠に“お友達”から始める事になつたんでしょ？」  
「あううう。そうだよ」

幾ら社交界での評判がよくとも、頭の足りない娘は王太子妃ひい  
ては王妃に据えるには役者不足ではないかと印象を抱いたのである  
う。

でなくば、大勢の前での求婚といった、荒っぽい手段をとつた第  
二王子の事だ。無理にでもサラを正式な婚約者とするべく行動を起  
こしたであろう。

取り敢えず、最初の危機を一人は脱したのであつた。

## 先延ばし作戦の結果（後書き）

自分で後々砂を吐く位、甘ったるい声をサラ嬢は見事に出してみせました。

## 小魔達の魔羅 やの | (繪書モ)

ある意味閑話の様な話。  
「コーヒロイーン、登場？」

## 小鼠達の暗躍 その一

『どうこうことだ。フィオーレの家の令嬢は、お前から聞いた話と随分と違うじゃないか』

隠し切れない怒りがこもった聞き慣れた声に、王宮付きの侍女・ルツは足を止めた。

丁度、同僚から頼まれていた仕事もやり終え、上司である侍女長からは休憩に入つていいと言っていた時間であつたため、こつそりと柱の影の隠れて聞き耳を立てる。

『昨夜、フィオーレの令嬢とお話しになられたのでしたね。何かございましたか?』

『そこまで知つてはいるなら話は早いな。昨日の夜会の事だが、……』

話しているのは次期国王であられる第一王子・ダニエル殿下と彼の側近の一人であるアロンで間違いない。

一人頷きながら、ルツは尚も耳をすませた。

『昨日、初めて面と向かつて令嬢と話してみたが、なんなんだあれは』

『おや? 振られたのですか?』

『違う! が、似た様なものだらうな。フィオーレの令嬢がオレに向かつてなんて言つたと思つ?』

理想の王子様として国内の乙女達には絶大な人気を誇る第一王子であるが、実際の彼がかなり口の悪い人物であるとルツは知つていた。

話している内容は三日前に王子が求婚した相手である『金の妖精姫』であるサラ・フィオーレ伯爵令嬢で間違いないだろ？

王子が彼女の事をどう思っているのかについては、王城に務める者達の間でもかなりの関心的であった。

『　　“お友達から始めましょう”だと

『は？』

『なんでも、自分は今までに男と付き合つた事がありませんので、是非とも“お友達”から始めたいのだそうだ』

『俄には信じ難いですね……。大事に育てられ過ぎた弊害でしょうか？ いかにも恋愛小説にのめり込み過ぎたあげく、現実にもそれを要求している令嬢としか思えませんね』

『　　だろ？ 夢見がちといえば聞こえがいいが……』

これは面白い事を聞いた、トルツは内心ほくそ笑む。

部屋の外で柱の陰に隠れた所で壁に張り付く様にして聞き耳を立てている者がいるとは気付かないまま、止ん事無き方々の話は続く。

『いくら見た目が美人でも、現実と架空の区別もつかぬ頭が空な女じや話にならん。王太子妃……いづれは王妃としてオレの隣に立つ女があんなんじゃなあ』

『しかし、私が以前お話しした際にはそのよつには見えませんでしたが……』

『だつたら、昨日のあの発言をお前はどうじるんだ』

声が段々遠ざかっていく。

室内に設けられた扉を使って、他の部屋へと移るのだろう。望外の収穫に満足して、ルツは張り付いていた壁から身を離した。

「これは良い事を聞いたやつだ。早速エステル様にお伝えしなきや」

語尾に音符でも付きそつた弾んだ声を出しながら、ここ最近お会いしていない敬愛する主人の姿を思い浮かべたルツは走り出した。

一見、どこにでもいそうな平凡な顔立ちに、この王国では珍しくもない薄い茶髪。

癖のある茶髪を三つ編みにして背中に垂らし、青い瞳を興奮で輝かせている、そばかすの散った幼い風貌の娘の名をルツと言う。

『黒猫令嬢』の子飼いのく鼠の一人にして、何の因果かエスティル・セラーレを主人として尊敬する、世にも稀な純朴な娘であった。

## 小鼠達の暗躍 その一（後書き）

エスティルの情報源、その一。

王宮に関する話題は大体が彼女の口からのものです。

## 次なる一手の前の小休止

『失礼致します、お嬢様。王宮より招待状が届いております』  
「……許す。入れ」

未だ興奮冷めやらぬサラを自室に招き入れたまま、エステルは室外からの控えめな声に気怠氣な声を返し、化粧台の前に座ったエ斯特ルの髪を弄つていたサラもまた、扉の方へと振り返る。

「こちらになります」

「ん。」苦労

銀盤の上に載せられた紅い鑑が押印された封筒を手に取り、エ斯特ルが尊大に頷く。

一礼して、侍女が下がると好奇心を隠せぬ声でサラが問い合わせて来た。

「それって、王宮からの招待状じゃない。私も第一王子……王太子から頂いたわ」

「まあね。さすがの叔母様ね……。頼んだのは昨日だったのに……」「叔母様つて……。エバ叔母様？　『黒蝶』って謳われて、今でも社交界の殿方の視線を一心に集めておられる？」

「うん」

『金の妖精姫』であるサラとは、また違つた意味で一目を集める叔母の姿を脳裏に思い浮かべながら、エステルは頷く。

サラ・フィオーレが清楚で儂い雰囲気のおどぎ話の妖精の様な少女であるならば、エステルの叔母であるエバ・セラーレは、妖艶かつ豪華絢爛な魅力を放つ美女である。

セラーレ伯爵家の特徴である艶めく黒髪を結わずに垂らし、ふくらとした真紅の唇を持つ彼の美女に、一度甘い声で囁かれれば、落ちない男はないと専らの噂だ。

この王国のみならず、他国の王族、貴族、果ては遠い西の皇国の皇族までも虜にしてみせたと言う彼女が結婚した時は、この国だけでなく隣国の中でもが悔しさで枕元を濡らしたとか。

そんな彼女に甘い声で頼まれてみる。

王国の役人であっても、瞬く間に彼女の意に従うべく、滅多に社交界に姿を現さないエステルのために招待状を拝んでくれるだろう。

「そつか……。エバ様は私達に協力してくださるの？」

「うん。個人的に、あの人はサラに同情していたからね」

真っ赤な唇と妖艶な雰囲気のせいで何処か近よりにくらい印象を受けるあの叔母は、実はかなりの子供好きだ。

実際、サラも社交界に出入りし始めた頃には何度も世話になつた事があつたため、エバにはかなり懐いていた。

「あの人、男を誑すのも得意だけど、女を誑し込むのも上手だからね」

一部の貴族令嬢からは「お姉様」と言われて慕われているとかいないとか。

そのせいで彼女の夫には男だけではなく、女からの嫉妬も向かうらしい。

義理の叔父ながら氣の毒な事だ。

「これから先、どんな手を打つにしろ、必要なのは情報だからね。私の計画が上手くいくかどうかも……」

「エステル……。本當になんて言つたら良いのか……」

「気にしてないで、サラ。それより、計画も大事だけど、肝心のあんたの演技が下手だったら意味ないからね。次の夜会が開かれるまでの三日間、ばっちり練習しどきましょうか？」

「わ、私にあの甘ったるい声をまた出せと……！」

ぞわわ……、と鳥肌を立てたサラに、エステルが綺麗な笑みを浮かべる。

見る者の頬を赤らめさせてしまいそうな、そんな魅力的な微笑みであったが、サラの目には鼠をいたぶつて遊ぶ時の猫の姿にしか見えなかつたのであつた。

## 次なる一手の前の小休止（後書き）

エバ・セラーレ  
エステルの叔母で、〈伯爵家の人々〉に出て来た『黒蝶』は彼女です。

## 目指す所は？

壁の一面にピカピカに磨かれたガラスが張られ、室外に音が漏れる事の無い様に作られたとある小部屋。

セラー・レ伯爵家の邸の中でも、外れの方にあるこの一室には一人の少女の姿があった。

「立て、立つのよ、サラ！」

「うう……。そんな熱血スポコン漫画みたいな事言われても……」

普段の無気力な姿はどうにいったのか、片手にハリセンを持つて仁王立ちしているのは『黒猫令嬢』ことエステル。

そんな彼女の前で月光を紡いだ様な金髪を幾筋も顔に垂らし、床に崩れ落ちているのは社交界の憧れの花『金の妖精姫』ことサラであつた。

「も、もう無理……。このままじゃ、自分自身の演技のせいで死んでしまいます」

「ちつ……。軟弱ものが」

貴族令嬢にあるまじき言動でエステルが舌打するが、無理に続行する気もないらしく、部屋の隅に置いてあつた粗雑な作りの椅子に腰掛けた。

その隣に、正しく疲労困憊といった有様のサラが座り込む。

「ねえ、エステル。その、今更こんな事を聞くのもなんだと思つけど……」「なに？」

「その、エステルが目指す所を教えてもらひても……良い?」

何を考えているのか分からぬ夜空色の瞳が、じつとサラを見据える。

そうしてから、一言。

「……本当に今更ね

「つるさいー!」

顔を真っ赤にしたサラを面倒くさうにあしらいながら、エステルがうーん、と伸びをする。

凝り固まつた首筋を解す様に、首を左右に揺らしながら、エステルは小さく何かを呟く。

「え? なんて言ったの、エステル?」

「“ギャップ萌え”って知ってる、サラ?」

至極真面目な表情でこちらを見つめて来る親友の、突拍子の無い言葉に、サラは首を傾げるしかなかつた。

## ギャップ萌え

「つまり、アレでしょ？ 普段は厳めしい騎士様が、雨の日に捨てられた子猫を拾うのを見たヒロインが相手の普段とは違う一面にきゅん、と来た時に起こる現象のことよね」  
「的確かつ適切な例をどうもありがとうございました」

「じり、とサラが可愛らしく首を傾げる。

それに椅子に座つたままのエスティルは尊大に頷いた。

「つまるところ、相手の今までに知らなかつた側面に心を奪われる事が、俗に言つて『ギャップ萌え』だね」

「ふんふん」

「それをやううと思つうの」

「『ギャップ萌え』を？」

「くり、とエスティルが頭を上下に振る。

サラの波打つ金髪とは違つて、さらさらの黒髪が動きに合わせて揺れた。

「正確には、反・ギャップ萌えを、だけどね」

「……？ どういづう事？」

何を考えているのか分からぬ、無感情な夜空の色の瞳がサラの顔を映す。

「もし、次期王妃を望まれる程の娘が、実はそれに値しない人物であつたと思われたら、どうなる？」

「……発表がされた後なら、当たり障りの無い理由を作つて自然解

消を狙うわね

「でなくば、そんな相手を次期伴侶に選んだとした事が周囲にバレてご覧なさい。あつという間に見る目が無いと周囲に非難されるね……特に、次期国王ともある者ならば」

大勢の人間の上に立ち、一国を治める立場にある王は自身の配下たる人物がどのような者であるのかを見抜く慧眼を必要とされる。

「下手すれば、第二王子自身の傷に成りかねない話ね。ぞっとするわ」

「ここで重要なのは、あんたが上手く立ち回らないと飛ぶのは婚約話ではなく、あんたの首だつて事。……王家の方々は首の取り替えが大好きだしね」

そうすれば王子の婚約は白紙に戻る。

死人に口無し。

その言葉は、正にその通り。

後世に伝えられる物語を進めるのは、いつだつて生き残った者達なのだから。

「良い事？ サラ・フィオーレ令嬢は実は次期王妃として相応しくない娘であるという事を、あんたは第二王子“だけ”に見せるのよ。事実とは異なる「真実」を、知る相手は少ない方が良いからね」

「……王家の方々を騙すという訳ね。心臓に悪い話ね」

興奮を隠せない親友の姿に、エステルもうつすらと微笑んだ。

ギャップ萌え（後書き）

うーん。

なんかダークな雰囲気に。

## これ、戦場へ（前書き）

おかしいな。それでも恋愛小説の端くれなのこそ、ちつとも甘酸っぱさがない。

## ござ、戦場へ

王宮から届いた夜会の招待状。

第一王子のお妃候補として衆目を集め サラ・フィオーレはその晩、もう一人の娘とともに王宮の門をくぐった。

「……本当に大丈夫かな？」

「それ、もう五回目。いい加減別のことと言つて」

ガタゴトと、規則的な音を立てながら馬車が進む。

フィオーレの家紋が押された馬車の中にいる娘の数は、二人。

「もう、エステルはいつも冷たいんだから。少しは心配してよ」「心配するくらいなら、馬車の中で寝た方がマシ」

そつけなく宣言され、サラが頬を膨らます。

幼い仕草も彼女がすれば普段とはまた別の魅力を引き出した。

「だつて……、これからすることは王家の方々を謀ることでしょ？」

不安にならない方がおかしいわ

「……その王家の方々直々の求婚を嫌がっているあんただけには、言われたくないわ」

馬車の分厚い扉を透かして、遠くに聳え立つ王城をエステルが睨むように目を細める。

うなじに一房だけかかった髪がさらり、と揺れた。

「それにしても、エステルは綺麗ね。こうしてちゃんとした格好を

していふところをみたら、エバ叔母様そつくりだわ

「お世辞として受け取つておくわ」

普段のだらけた格好を一変させて、艶やかな黒髪を結い上げ、髪飾りを差し、美々しい衣装に身を包めば、エステルも麗しい娘へと変身する。

ただ、いつもはぐうたらし過ぎでちやんとした格好を整えていいだけだ。

「もしかしたら、ジージーの殿方に見初められるかもよ。そしたらどうする、エステル？」

きやあ、と可憐らしい悲鳴を上げたサラにじつととした視線を送る。

少しして恥ずかしそうにサラが座席の上で小さくなつた。

「…………すみませんでした」「よひしー」

ふん、と偉そうに鼻を鳴らし、エステルが腕を組む。  
石畳の上を走っていた馬車の速度が徐々に落ちて、停車する。  
御者台の方から声がすることから、王宮の門についたのだろう。  
何度目かのやり取りののち、再び馬車が走り出した。

「ナラ」

「わかってる」

短く告げたエステルに、サラが小さく頷いた。

少女たちの自由を賭けた、第一戦の始まりだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0962y/>

黒猫令嬢の気まぐれ

2011年11月24日19時53分発行